

奥田昌道先生還暦記念集会

愛——ロマ書8章から

1992年10月4日（京都 御車会館）

奥田 昌道

神の国の担い手 第二走者の使命 義なるキリストの捨身のご愛 神の法と肉の法 キリスト
の愛の証 十字架の贖い 主に贖われた姿 満を持して時を待つ 御霊の内実 十字架・聖霊
が原点 御霊の愛

●神の国の担い手

皆さん、お一人お一人よく集まって下さいました。

昨晩は前夜祭祈祷会ということで、第1回の集まりの司会は村岡兄がして下さいました。今回は錦織兄はもっぱら裏方さんで、今日は松井兄、梅村兄とそれぞれが語って下さいました。言わば錦織君の兄貴分に当たる村岡兄、そして同輩の梅村兄、松井兄と——松井兄は一年下ですが、年はともかくとして——私の歩みあるいは私たちの歩みにおいて、あの梅村君たちの群れが育って来ました。こちらには何の計画もないのですが、昭和44年前後の頃が一つの祈りの沸き上がる一時期でありました。それからまた、何年か経って、私がドイツから帰りましてから、そういう時期がありました。今、三度目のうねりではないかと、そんな思いがしています。即ち、昭和でいうならば42、43年〜45年頃、それから54、55年のあの頃、そして今、平成4年（昭和でいうと67年）というように、今の時期は何か、節目を迎えているような気がいたします。

私も梅村兄と同じように夢中で来ましたので、後ろを振り返っているゆとりはなかったのですが、否応無しに、60年という還暦の記念の日を迎えました。これを契機として皆さんが集まろうということをし合わせ、5月の春の特別集会の時にそんなお話がおのずと沸いて来ました。それで、村岡君、錦織君、その辺りでやってくれと、いかようにでも協力するからと梅村兄が言い残して、後は知らんよということですね（笑）。それで忠実な友である村岡、錦織両君が松井君、藤井君、森君等とご相談なさってこの京都に縁のある人たち、ここで祈りを共にした人たち、そういう人たちに呼びかけてこういう集いをしようということになりました。

私はさきほど座って、松井兄のお祈り、聖書朗読を聞きながらつくづく思いましたのは、やはり小池先生がパイオニアです。そして私は第二走者。やがて第三走者、これは複数です。第二走者はどうも私一人みたいな感じですが、第三走者となりますと、昨日から司会に立つたり、話したりして下さった方々、そしてそれを踏台にしながら、枝別れをしていらつしや



る方々、本当にさっきの松井兄の沸々ですよ。もうたこ壺みたいにあちらこちらから湯が沸き上がり煙が出ています。奈良の弘野兄姉御夫妻、そして四国では森下兄がいてくれま
すし、裾野の松井君、大阪の梅村君、そして京都の地元では藤井君、森君、錦織君、村岡君、
光野君そういう方々、そして御婦人の陰の力、そういうものが相和しています。サタンも
大変ですよ。今までは小池を潰せば良かった、次は奥田を潰せばいいのだと。今度はあち
らを潰したらこちら、こちらを潰せば向こうと、もう潰しようがない。それが本当に根を張つ
て素晴らしく花を咲かせていく。ですから、皆さんへ次の使命がかかってきている気がし
ています。もちろん私は第二走者として、恐らく皆さんの還暦あるいは古稀くらいまでは
頑張り、しっかり見極めようと思っています。親父おやじというのは、子どもが立派になるのを
見届けないと普通死ねないものでしょ。私は親ではないけれども、主に在っては霊の子ど
もたち、あるいは弟たち、妹たち、そういう方々の本当に花咲く姿を見守り、そして共に
喜びたいと思います。そんなつもりでいますので、絶対に私より先に倒れないで下さい。

私は小池先生の著作集第一巻『無者キリスト』（1975年刊）の刊行記念集會が東京で
あったとき、先生は確か71歳で私は43歳の時です。東京に行きまして、先生の集會で私は
はつきりこう証言をしたのです。自分は43歳でしょ、まだ60歳まで随分先のことと思っ
た。私が還暦になるころ先生は88歳、米寿です。日本ではこの米寿をとってもお祝いします。
それから還暦もお祝います。だから、先生が米寿の時、私は還暦だから、二人にとって
1992年はなかなか記念すべき楽しい年になります。ぜひ、そうありたいものですねと、
そういうことを申し上げた。そうしたらそれが今実現しているのです。先生は多分、白寿
（99歳）あるいは白寿を越えて行かれると思う。

人が行けて私が行けないはずはない。頭はだめですが、その他のことにおいて、私はい
つも同等若しくはそれ以上でありたいと思っています。水泳を始めたのもそうなのです。
先生は特別集會で、伊東のいづみ荘のプールでも松崎の海岸でも楽しそうに泳いでいるで
しょ、くやしいではないですか。だから僕は53歳からやりだした。8年めでまだ初歩ですが、
まだまだ数十年ありますから。そしてこのように常に何かに向かって挑戦する。

そういう考えがあるのですが、本当にさきほどから見ていましたら、皆さん、小池、奥
田の次の世代として主にあって成長していて下さり、神の国の担にない手として、皆さんが茂
り花咲かせんとして下さっている姿は本当にうれいすね。まだまだ去り行く者として
とは言いませんが、しかし、確かに続いて後を追って生い茂っていく者たちの存在は、こ
のような歩みをしてきた者にとつての喜びであり望みですね。そのことを皆さんは本当に
自覚していただきたいと思います。

●第二走者の使命

私は小池先生の福音を一代で終わらせたら、もったいないと思っています。先生はあま



りキリスト教会とかそういう処では受け入れられないようです。しかし、受け入れさせてみせようではないかとの悲願でやっています。先生は東京で、私は京都において。いろいろな面におきまして、本来、東京と京都はあまり関係がない。先生は文学部だし、私は法学部ですから、関係ないわけです。ところが、1959年、京都大学エマ才会主催の小池先生を招いての講演会がきっかけになりました、それが京都に飛火したわけです。そのときの題が「無的実存」（1959/1/9 楽友会館で講筵）で、それが飛火し、その火が消えていない。だから、小池先生の福音と言いたいですね、あるいは福音に貫かれた生きざまとでも言いましょうか。先生の中に燃えたもの、先生のお兄さんの一粒の麦としての死を通して先生の中に燃えたもの、これはもう如何いかんともしがたい事実です。神の事実、神のドラマなのです。その燃えた火、これを我々が受けとらないで誰が受けとるのか、私が受け手になりたいという悲願靈願が起こった。

だから私は1972年、今からちょうど20年前、一人の歩みを始めました。私はあちろちろから人を集めて、それで旗揚げをしようというのは好まない。まず、自分から始めます。まず自分が捨石になれば、一人で行けと。そう思って私はそれまで所属していた群れを離れました。私は二足わらじはできない。こちらの私のお世話になっている群れ、そこでも尽くしたい。けれどもそれと私の悲願との両立に加えて、大学の仕事、研究、教育、そういう幾つものできない。だから、私は一人で、ただ小池先生の中に流れてきたものを次の世代にバトンタッチする、第二走者になりたいと。どなたにもご迷惑をかけたくない、どなたも傷付けたくないという思いで、1972年1月1日から家内と二人の集会を始めたのが、ちょうど20年前です。しかし私の中に起こってきた願いというのは、主から賜った願いと確信いたしました。

私は市川先生の非常に忠実な友であり、弟子おとうとというか、弟弟子として片腕として非常に頼りにされていました。だから市川先生から離れるということは、先生に対して申しわけないという思いは消えなかつたのですが、けれども市川先生が志しておられる道と私が願った道とはやや違いました。昨日、市川先生のお手紙をここで読みましたが、あのお手紙ともう一枚別のお手紙があります。そこには、自分は聖書神学を自分なりに生涯をかけてやりたいと——「天旅」という個人雑誌をずっと出しておられますが——そこに連載されているものをまとめて聖書神学として世に問いたい。それに自分を燃やし、いわゆる第一線伝道的なことは自分はない。それは奥田君に頼むよと、書いてありました。だからそのときは辛かったですが、やはり私は神様の大きなみ旨というか、迫りというか、この小池先生の中に燃えたものを受けとる、それに捧げたいと思っています。

いわゆる教会の伝統は日本にありますね、カトリック教会、プロテスタント教会、いろいろな教会があります。それはそれでちゃんと後継者がいます。それなりにちゃんと伝えていく組織もあります。ところが小池先生というところに燃えたものは、放っておけば一



代限りで終わってしまう。私はその受け皿になろう。パイオニアというのはとにかくどんな道を開いて行く。道を開いて行った後ろには、整理をしないといけない問題がいっぱい残っているかも知れない。願わくはそれを咀嚼^{そしやく}し、きちつと浸透させていく仕事ですね、それが私の仕事ではないかと思いました。それで、20年の歩みを振り返りますと、この課題は主から賜った課題だとの思いがいたしますし、またその目標に向かって徐々に形を成して来ているのではないかと思っているのです。

それから、昨日は村岡兄が私の常日頃、京都の集会で語っていますことを、実に見事に話して下さいました。今日は松井兄、梅村兄がまた別の角度から話して下さいました。どれもこれも本当にアーメンです。梅村兄の愛——主我を愛す、そしてその愛は十字架・聖霊という「十字架即聖霊」に極まっているという——本当に梅村兄とか、弘野淑子姉の祈りで助けられてきた。正直、昭和40年代の苦しかった時、大学も大変な時でしたし、私自身もいろいろ悩みの中にありました。その時期にどれだけ梅村兄や弘野姉の祈りを通して、支えられたか分かりません。

それと森下兄が1977年に御所で聖霊のバプテスマを受けられて、そして不思議なことに1978年に京都へ内地留学で来られ、私がドイツに留学して留守の1978年の一年間、森下兄、錦織兄、藤井兄、光野君、大野君、そういった方々が集会をずっと支えてくれたのです。森下兄の存在はとても大きかったと思います。その森下兄は学会で9月24日頃から二週間、イタリアの方に行っておられる。それで今日の日付けの、四国キリスト召団だより（「ともしび」）を私の方に送ってきて下さいました。ですから、松井兄の証言、梅村兄の奨励^{あわ}に併せて、森下兄の文章をここで読みしたいと思います。

《早いもので、奥田先生に初めてお会いしてから満15年になろうとしております。

初めてお会いした日のことは、今でもはっきりと覚えております。先生宅の玄関を上がり、階段の下の廊下のところでした。大和屋旅館での特別集会の準備のために多くの兄弟姉妹が行き交い、廊下は大混雑をしていました。先生も慌ただしくされておられました。まずみ姉のご紹介に先生は足を止められ、両手で私の手を堅く握られ、そして、やさしく私の顔をじつと見られ、「初めてお会いした気がしません」と、おっしゃって下さいました。私はそのお言葉のみならず、先生の澄みきった眼差^{まなざ}しがとても印象に残りました。

1. ああ主のひとみ、まなざしよ、
富める若人 見つめつつ、
きよきみまえを 去りゆきし
なげくはたれぞ、主ならずや。
2. ああ主のひとみ、まなざしよ、
よわきペテロを かえりみて、
三たびわが主を いなみたる
ゆるすはたれぞ、主ならずや。
3. ああ主のひとみ、まなざしよ、
み傷しめして「信ぜよ」と、
うたがいまどう トマスにも、
の宣らすはたれぞ、主ならずや。



4. きのうもきょうも かわりなく、 血しおしたたる み手をのべ、
「友よ、かえれ」と 招きつつ 待てるはたれぞ、主ならずや。

（讃美歌243番）

私共はこの15年間、特別集會を除いては普段は、奥田先生の聖日集會のテープを通して導かれてまいりました。四国の田舎での15年をかえりみますと、たどたどしい歩みながらも、この福音から外れることもなく、今日まで導かれて来ましたことは不思議な気がします。一週間ごとにお送りいただく先生の集會テープがなかったならば、私共は茨の中に播^まかれた種同然であつたかもしれません。

今になって気付くのですが、初めての日に出会わしめられた先生の澄みきった眼差しは私共になくはならぬ恵みでありました。聖日集會のテープの中で、司會者の司會が終わって、奥田先生がお話になられるまでの、あの沈黙の時間。あの時、私共も背筋を伸ばし、靈の眼で先生の眼差しにふれさせていたでいています。このように、一週間に一度、御講筵に添えて、先生のあの眼差しをおお送りいただきました。それは、この15年間一貫して変わることはありませんでした。私共は先生のあの眼差しに重ねて、「ああ！ 主のひとみ、まなざしよ」と、どれほど感じさせていただいたことでしょうか。もはやそれは恵みの眼差しでした。日常生活の中にあつて、富める青年の様相から、時には、主を否むペテロ的な危うさから、あるいは、不信のトマス的な様相から、何度立ち帰らせていただいたことでしょうか。まるで、先生の語られる福音のみことばが主のまなざしともなつて、私共は助け起こされ、救われ、今日まで導かれてまいりました。

「されど我には、我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。
之によりて世は我に對して十字架につけられたり、我が世に對するもまた然^{しか}り」（ガラテヤ6・14）

御講筵録『聖書に初めて接する人のために』（1991年12月22日、四国キリスト召団発行）の中に告白されておられますように、みことばが音楽のように、響いておられる先生のお姿は、最も慕わしい私共の目標でもあります。先生が輝けば輝くほど先生の実存は、私共が十字架の贖罪の恵みを生涯かけて受けとつていくべきことを指し示しているように、最近思えて仕方がありません。

現在、先生のお許しを得て御講筵の文字化を少しずつさせていただいておりますが、テープを拝聴している時とは違って、文字化をしてみても初めて気が付くことは、恵みがこんなにも隅々^{すみ}にまでぎっしりと詰まっていたのかという感慨です。何か細かいひだの隅々にまで恵みが行き渡っていて、見過ごせないのです。先生の御講筵を本誌に掲載させていただいているうちに、私の中にひとつの願いが生じてきました。それはヒルティさんが著わされた『眠られぬ夜のために』のよう



なご著作を、21世紀の世に投じていただきたいという願いです。先生は相変わらずご多忙かと思われますが、その際に「ともしび」誌に掲載の御講筵録を下原稿にしていたければ、どんなに嬉しいことでしょうか。こんな願いをも我が祈りの中に加えたいと思っています。」（「ともしび」第173、174号「奥田昌道先生の還暦に寄せて」）

こういう心暖かい文章を真心込めて書いて下さいました。そういうことで、イタリアの方いらつしやいますが、一緒にいて下さるという気持ちでこれをご披露させていただきました。

あのヒルティの『眠られぬ夜のために』というのは本当に慰め深い書ですね。何度か大事なところや自分の好きなどところを読み返したり、あるいはそれを文字にしてコピーをし、エマオ会の学生諸君に配ったりしてきました。実生活の中でどのように福音を生きていくのかという課題を、ヒルティは『眠られぬ夜のために』という1月1日から始まる一日一日の日ごとの糧、そういう形で著わされました。森下兄が私に日本版のそういうものを書いてくれということは、私たちが本当にキリスト者として人間らしく、排他的でなく、みんなを包んでいく福音。しかもそれは思われたものではなくて、実生活の中で生き生きと生きていく、そういうキリストに根差した我々の日常生活——結局昨日、村岡兄がお話になった「日常生活の中の福音」というもの——その知恵のようなものを森下兄は書いて欲しいと願っていらつしやるのではないかと思う。私には全く驚きだったのですが、言われてみたら、そういう使命があるのかも知れないと、思っています。

●義なるキリストの捨身のご愛

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。肉にしたがう者は肉の事をおもひ、霊にしたがう者は霊の事をおもう。肉の念は死なり、霊の念は生命なり、平安なり。肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。されど神の御霊、なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん、キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。もしキリスト汝らに在ざば体は罪によりて死にたる者なれど、霊は義によりて生命に在らん。もしイエスを死人の中より甦らせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦らせ給いし者は、汝



らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活し給わん」（ロマ8

・1311）

ここで盛んに肉の思いとか、肉と霊、それが対比されています。ここに書いていますのは我々の生まれながらの姿、キリストを知らざるあるがままの、野性の私たちと考えていただきたらいい。それが何故神に逆らうのか、それは自己中心だからです。神のことを思わない。何よりも自分の事を大事にする。自分の思いを大事にする。自我を立てていく。神様に従おうとはしない。これはもう本性でありまして、万有引力の法則が動かしがたいものであるように、みんなこの引力で引っぱり込まれている。我々の本性つまり肉という生まれながらの姿というものはそうなのです。だから、それをそのままにして理想に向かって羽ばたこうとする。自分を鍛え上げて何とかしようとする、これはけなげで空しい努力なのです。けなげで空しい努力と言わざるを得ない。しかし、けなげで空しい努力をすることが人間の生きがいだ、それが人間の誇りだと、考えるのです。人間以外はそういう理想に向かって燃えることをしない。人間だけが理想をもつてそれに向かって自分を鍛えて、そして少しでも良き人間、愛のある人間、麗しき人間になり、己に勝つのだと。それはけなげなのですが、真剣になればなるほど絶望へと導いていく。

パウロはその宗教の世界で、あのユダヤ教の最も厳しいパリサイ派の中でその道歩んだわけです。

「律法^{おきて}については責むべきところなし」

と、自分のことを言いました。そのパウロがこれで本当に苦しんだ。なるほど形の上では立派な人だ。律法を守る点では誰もパウロさんにはかなわないという立派なユダヤ教徒だった。しかし、内側の葛藤^{かつとう}たるやすごいでしょうね。第一、愛がない。自分のことで精いっぱいなのです、少しでも律法^{おきて}に外れないようにと。そして律法から外れている人がいたら徹底的に弾劾^{だんがい}する、「私がこれだけやっているのにお前は何だ」と。それで、パウロはステパノの姿を見て打たれた。ステパノは石打ちにされながら、

「主よ、彼らを許したまえ。この罪を彼らに負わせ給うな。ああ、主が天上に立っておいでになるお姿が見える」

と言って、光輝いて殉教していった。その姿にパウロは打たれた。しかし、反動的にいよいよ猛り^{たけ}狂って、キリスト教徒たちを迫害するためにわざわざエルサレムの大祭司から添書^{そえがみ}をもらって、殺害の息を弾ませながらダマスコへ赴いたと、使徒行伝にあります。そのとき白昼から光が現れて、パウロは打ち倒され、

「何ぞ我を迫害するか。刺ある策^{むち}を蹴^けることは難いことである。自分で自分を

滅ぼしてしまう」

との声が響いてきた。

「あなたはどなたですか」



「汝の迫害するイエスである」

と。そういうことが使徒行伝9章、22章、26章に詳しく書かれています。そういう劇的な体験を通してパウロは古き我に死にました。光に打たれて目が見えず、ものが言えずという姿で三日間過ごしました。そして主の弟子アナニヤに、

「今、パウロという青年が祈っているから、彼の処へ行つて手をおいて祈つてやうて欲しい」

と主のお告げがありました。それでアナニヤの按手あんしゅを通して、

「目から鱗うろこのごときもの落ちたり」

と。そして、アラビヤの方に行つて深く祈っていたら、十字架がはつきりと見えてきました。律法おきてや自己克己ではなかったと。己を高めて行く道ではありませんでした。

むしろキリストは、神様のみ旨に従つて自分を捨て去り、人の罪を背負つて地獄のどん底に落とされ給いました。全き義なるキリストの捨身の愛。この姿で、不義の首かしらであるパウロが味わつてしかるべき地獄を味わい給うた。それはパウロを救うためである。

パウロを許し、生命を与え、神の器として用いるために、キリストは底無き処に下り給うたということに本当に気づきました。

● 神の法と肉の法

「我キリストと偕ともに十字架につけられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が生命を捨て給ひし、キリスト・イエスを信ずるによりてなり。

我は神の恩恵めぐみを空しくせず、もし義とせらるること律法おきてによつて得らるるならばキリストの死に給えるは徒然いたずらなり」(ガラテヤ2：20～21)

我はこの神の恩恵おろそを疎かにはしたくないと。そういうパウロがロマ書7章のところで肉に在る自分、キリストなき自分、その姿がどんなものであるかということを行っています。自分では善を欲する。自分ではかくありたい、本当に神のみ旨に従いたいと、神の国を求めている。神の国とその義を求めている。本当に誰よりも熱心なのです。ただその熱心はみ霊による熱心ではなかった。肉による熱心であり、己が義を立てていた。そのことにパウロは気づきました。

「わが骨肉であるユダヤ人の兄弟の救われんためには、たとい私はキリストに呪われても捨てられても、それでもいい。同胞が救われて欲しい」

ということを切々と語っているのが、ロマ書9章から10章です。彼らは熱心だ。しかしその熱心は知識によらない。神の知恵によらない熱心だと。神の義を知らないで己の義を立てようとした。神の義に従っていない、ということを行っています。

ロマ書7章では自分の願いとしては本当に神のみ旨かなに適いたい、喜ばれたいと思つてい



るが、自分の中には別の法則が働いて、自分を罪の虜とりこにしている。どうしようもない、本当に二重人格だと言っているわけです。

「ああ、我悩める人なるかな、この死の体からだより我を救わん者は誰ぞ。我らの主イエス・キリストに頼よりて神に感謝す。されば我みずから心にては神の律法おきてにつかえ、肉にては罪の法のりに事つかうるなり」（ロマ7・24～25）

私の体の中には明らかに神様のみ旨に反する別の法が働いている。はつきり分かる。私の中には神の法も働いているが、神の法は無力になっている。神の法が無力になって罪の法の方が有力である。私を閉じ込めて、私はそれに縛られてどうしようもないと。ところが、解決があつた。キリスト・イエスが上から下り給うて、私のために全部、道を開いて下さつたと。

「我らの主イエス・キリストに頼よりて神に感謝す」

と、この一行にそのことが出ています。どういう方法でとか、どのようにしてとか、何も書いていません。ただ、「我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す」と。そしてまたすぐ自分に戻って、

「我々は心では神のみ旨に仕えたいと思っていながら、生まれながらの我は罪の法に仕えているという二重構造である」

と。では、いつまでも二重構造で平行線で行くのかといえ、そうではなく、その矛盾もやがて解決される時がくるということがこのロマ書8章に出てきます。

まず、はつきりしておきたいことは、

「この故に」

キリストが十字架で私たちを完全に贖いきつて下さつたという恵みの故に、

今やキリスト・イエスの中に抱かれて、包まれて、抱き取られて在る者は、

もはや罪に定めらるることなし」（ロマ8・1）

これは断定です。あなたがどう感じ、どう逆らおうが、違う考えを持つとが、そんなことは関係ない。罪の法則が貫徹したように今度は生命いのちのみ霊の法則が貫徹する。それはもつと強いと。この生命のみ霊の法のり、キリストの法が私の中に働かないときは罪の力は物凄く強かった。しかしもつと強いのがやって来た。それはキリストの生命のみ霊の法のりだ。これはもう罪の法よりはるかに強い。これを働かせるために、キリストは時いたりて我ら罪人つみびとのために十字架にかかつて下さいました。

克己の道はキリスト抜き道ですから、キリストなしで自分でやっていく道ですから、素手で近代兵器に向かつていくようなものです。ところがキリスト・イエスにある生命のみ霊の法、これは絶対に強い。向こうは罪の大群であつてもキリストはたった一人であるうと大丈夫であると。



●キリストの愛の証

そもそも罪というものが支配するようになったのは何故か。元をただせば、アダムという一人の人を通して罪が、死が入り込んできて、それがずっと浸透してしまいました。けれども、キリスト・イエスという一人の生命、一人の義なる人、その方の絶対善によって今度は生命が入り込んできたのだよと。しかも生命は死を吞んでしまっている。生命が死を吞んでしまつて、死に打ち勝っているのが「キリストの復活」という姿です。復活というのは我々と同じ姿で生きていらしたキリストが、栄光の霊体に変貌された姿、しかも贖^{あがな}い業を終えて変貌された姿ですから。そういうことを通して本当に勝利がやってきたというのがロマ書5章に書かれています。ロマ書7章のところではさっきの嘆きのことがありましたが、ロマ書8章は勝利の宣言です。

「肉によりて弱くなれる律法の成し能^{おきて}わぬ所を神は成し給えり」（ロマ8・3）

これは神様の側からの絶対的宣言ですから、誰もこれを否定できない。それで、

「キリスト・イエスに在る^あ」

ということが大事です。我々の願いとしてはキリストの中に在りたい、キリストに抱かれて在りたい。しかし人によつては、

「自分はキリストの中に在るのだろうか、ないのだろうか。主の言つた宣言は絶対だと、それはわかつた。ありがたいが、先生、私はキリストの中に在るのでしょうか？」

と、疑問をもつてしまう。しかし、それがぐらついたら、神様の宣言もかげろうのようにどこかに消え去つてしまふではないですか。

今から14年前になりますが、1978年にドイツに行っていますときに、小池先生のロマ書8章のテープ3回集會分（1978/6/18「霊と肉」、1978/6/25「神のドラム」、1978/7/2「愛」）を送つていただいたのですが、あれはすごかつた。その第1回集會のテープで、

「キリスト・イエスに在るとは、在らしめられて在る。自分で在るのではない。キリストが在らしめて下さっているのだ。主が私を愛しておられる。主が愛しておられる。私が主を愛しているのではない。主が私を愛しておられるのは、そのことに気づかされること、それだけだ。」

とおっしゃいました。主が私を愛して下さっている。主があなたを愛して下さっています。愛しているという愛は、感情的に「あなたが好きだよ」とか、「大事に思っているよ」とかの感情、そんなものに尽きません。それを越えて事実をもつて、

「私の愛の証は十字架だよ^{あかし}」

と、主が示して下さいたことなのです。キリストの愛の証は十字架なのです。

「私はお前のためにここで死んだ。十字架でお前は完全に贖^{あがな}われて、私の生命の中に在るのだよ」



と。さつき「十字架即聖霊」というお話がありました。聖霊は生命なのです。聖霊は愛なのです。だから、神様の愛の証はこれなのです。

「神は独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどにこの世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり」（ヨハネ3・16）

神の愛はいずこに顕^{あらわ}れたりや、十字架に顕れたり。己のみ子を十字架におつけになって、キリストからいえばご自分を神様に捧げて、罪の贖いをなし終えて下さいました。

●十字架の贖い

旧約聖書ですつと貫いているのは、「贖い^{あがな}」ということです。ことごとくに犠牲^{いけにえ}をささげています。しかも初子^{ういご}を、瑕^{きず}なき羔羊^{こひつじ}を。それがいない人は山鳩とか、別のものですが、とにかく瑕^{きず}なき動物を犠牲として捧げて、「その血が罪を清める」という信仰なのです。

そういつたずつと二千年にわたって続いてきた旧約の儀式が表していたのは実に来^{きた}り給うキリストの十字架でした。

「キリストは自ら羔羊^{こひつじ}となつて罪の贖いをただ一回きり、永遠に全^{まつと}うせられたり」

と、ヘブル書に出ています。

「この事実が本当に完全にお前を贖つたのだよ、それに文句があるのか」

という、激しい愛の叫びなのです。サタンが、

「あの人にはまだ、罪がありますよ。まだまだ良からぬことを心の中で思っていますよ。あんなのは神の子ではありません」

とか、なんだかんだと神様に告げ口します。そして、それと手を組んでいるのが良心です。我々の良心というのは断罪の役目、人が「いいよ」と言つても、良心は「だめだ」と。これが実にサタンと手を組んで断罪する。良心はそういう役目をする。しかし、この良心は力を持っていない。「だめだ、だめだ」というけれども、罪に打ち勝つ道を示さない。それに対してキリストは、

「私の十字架で全部片付けたのだから、それでも文句があるのか」

と。それがロマ書8章の中に出ています。

「誰か神の選^{よみがえ}び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。誰か之を罪に定めん、死^しにて甦^{よみがえ}り給いしキリスト・イエスは神の右に在^{いま}して、我らの為^{ため}に執成^{とりな}し給うなり」（ロマ8・33〜34）

と。なぜ、神はこの罪びとなる我を義とし給うかというと、

「私が彼を完全に贖いました。私が彼の罪を背負いました。彼と私は一つです。彼を罰し給うその罰が私に臨んだものではありませんか。でなければ、私は何のために死んだのですか。私は何のためにゲッセマネで苦しんだのですか。なぜ、私は



捨てられなければならなかったのですか」

これが十字架のキリストの叫びなのです。

「我が神、我が神、なんぞ我を見棄て給いし」

というのはその叫びです。

「私があれだけの十字架を負って苦しんで、それでもなお彼の罪がまだ残っているならば、私は犬死にはありませんか。私の十字架というのはそんな頼り無い情けないものだったのですか」

と。衆生しゅじょう悉く、どんな罪びとであろうと、本当に悔い改めてキリストのところに來たら全部赦される。

「本当に虫がいい。そんなことで道德の秩序が成り立つのか。法治国家が成り立つのか」

といわれるような深い贖いをキリストは十字架で全うして下さった。皆さん、その凄さに驚いて感動して、

「われ心狂えるなり」

というぐらいにならなければ嘘なのですよ。これはそこらにある出来事ではない。他のことはそう驚かなくてけっこうですが、この十字架という事態は本当に大変なことです。

「目未だ見ず、耳未だ聞かざる、人の心に思い浮かびもしなかったことを神は愛する者のために備え給えり」

と。これに驚嘆驚倒する。だから「ぶつ倒れ」とか、「ぶつつぶれ」とか、そんな言葉でしか表現できないことなのです。

「先生、十字架を受けるとはどうすることですか？」

と、そんなこと聞かれても答えられませんよ。もう、それは本当にこの事態がどんなに凄いかということを、生命がけでしっかり受けとっていただくしかない。またそのように追い詰められます。

いろいろな出来事を真剣に取り組んでおられたら、十字架へ十字架へと人間は追いやられて行きます。それは恵みですね。

だからそれぞれの段階にに応じて、いよいよこれが深められていきます。関門はそこだけです。もう、これだけが関門です。「この門を透得とうとくすれば」と、無門むもん関のお話にあるようですが、この関かんを突き抜ければ、すべてはおのずと実を結ぶ。これは産みの苦しみです。陣痛ですね。

「これを通れば、後は新しい子どもが生まれたという喜びだけがある」
と、キリストはヨハネ伝16章で言っておられます。

「あなた方は今は憂うれいあり、されどその憂は喜びに変わる」（ヨハネ16・22）
「喜びを与えに來た。あなた方を生命の中に満たしたい。それで私はやって來たの



だ」

と。非常に良心的な方、真面目な方は往々にして自分を責め、

「自分はまだ神様の^{むね}のみに沿っていない。自分はまだキリストの求めに即していない。まだ自分は捧げきっていない」

と、そのようにして物凄く「自分は、自分は」と、自分の足りないことをあげつらつて、十字架の前に佇^{たたず}んでいる。それでは、いつになったら佇むことを止めて中へ入れるのですか。向こうの天国へ行けるのですか。マタイ伝20章に、朝の9時から夕方^{いちば}の5時まで市場で立っていて、もう日も暮れようとする時に、雇い主が来て連れて行ってくれたお話があります。朝5時からの人^{ひと}も夕方^{いちば}の5時からの人^{ひと}も、神様はみんな等しく1デナリで雇って報酬をあげるというお話があります。朝早くから働いた者は、「なんであの人と一緒にですか」と訊いたら、

「この^{あと}後の者に汝とひとしく与うるは、我が意^{こころ}なり」（マタイ20・14）

その1デナリは、そんな一日の労働なんでものと引き替えにならない素晴らしいもの、かけ替えのないものをあげた恵みなのだと。

●主に贖^{あがな}われた姿

大阪召団の方々は梅村先生を通して、その実地教育を受けていらつしやると思いますし、京都も静かで穏やかですが、いつもここに立ち返るということを言っております。そこに行かなければ力は来ない、行けば力は来ますし、喜びが沸いて来ます。正直、道が開けます。道が開けるということを知っていれば、もう先のことを心配する必要はない。

「一日の苦労は一日で足れり」

その次ぎはどうなるか、何も心配しなくても良いと。本当に私はそう思っています。今日という一日、今日という一歩、それに自分を投げかけていけば大丈夫だと。それも全部ロマ書8章1節から来るわけです。

「どんな嵐であろうが、何であろうが、常にハレルヤである、とのキリストの宣言は永遠に変わらない」

と。よく小池先生は「無条件」ということをおっしゃいます。つくづく思います、何か条件付けられているものは最後のものではない。

我々は、これだけのことが成れば安心だとか、今後あれを克服しこれを乗り越えたら何とかなると、考えがちです。神様の世界はそうではない。現在既にそうである。何が来よう^うとそれは問題ではない。神様が、キリストが道を聞き給う。そもそも地上の生命がもう問題ではないのです。

我々は本当にキリストの凄い愛、凄い生命、キリストの光輝く世界、それを味わい知るために生まれて来たのです。



本来なら、それを知ったらすつと向こうに行つてもよきようなものですが、いや、そうはいかない。皆さんにはやはりこの世でもらわなければならぬことがあります。救われなければならぬ魂がいっぱいあります。そして神様の世界がどんなものであるかということを実証して欲しい。残念ながら神様が幾ら人々に話しかけても通じない。人を通してしか、神様は語れないのですね。余程の人は、パウロさんみたいにぶつ倒されたとか、何とかでいくでしょう。それもそれなりのプロセスがあつてあなつたのです。多くの人たちに霊なる神様がどんなに働きかけようとなさつても、どんな奇跡的なことを起こしても人々は信じない。「あれはありがたかつた、幸運だつた、つきにきまわつていた」ということで終わりでしよう。良いことをしてあげてもその程度。悪いことが来たら、「俺はついてないなあ」で終わりでしょう。いろいろなことがあつても、神様と切り離して自分の世界の中で通り過ぎてしまふ。これが人間の性、肉なのです。このような肉なる人間を本当に引っくり返して、神様のものにするには、証人、語り部がいります。

「我が言葉は霊なり生命なり」

ということを本当にキリストが語られたように語る。そういう語り手、証人がいるのです。そのために我々は地上に置かれていのです。パウロも言いました、

「私は本当に早く主様ののみもとに行きたいが、地上にいてこうして働いていることが皆さんのプラスになるならばもうしばらく残つていよう」と。

「我が生くるはキリスト、死ぬるもまた益なり」（ピリピ1・21）

だから我々が本当に地上に生み出されたのは、

「キリストの愛、キリストという永遠の大生命、これを知らんがためなり」ということです。

「朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦らせられ、卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦らせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦らせられ、血気の体にて播かれ、霊の体に甦らせられん」（コリント前15・42～44）

肉の種で播かれ、霊の体に、霊の生命に甦るとあります。ですからキリスト・イエスに在らしめられた者は末広がりです。この体はいつか、枯木の如く、枯れ果てるでしょう。しかし体がご用を果した時には、セミが脱皮して行くように素晴らしい霊の体となつて天に上つて行きます。

そういうことで我々には、嘆きだとか、もうだめだということはないのですよ。肉体は衰えていくでしょうが、それに勝る凄いものが築かれていきます。私の方が皆さんより先輩なので、やはり立証する責任があります。言葉に責任を取らなければいけません。だから、私はこれから何十年の生涯か知りませんが、この生涯を完全燃焼して、

「キリストに在る者の生き様はこんなものだ。クリスチャンの底力はこんなものだ。」



キリストの生命はこんなものだ」

ということを本当に自分の体で現したいわけです。勉強で現そうと思つても学者はいっぱいいいますので、それはちよつと難しい。仮にやつたとしても、「あれは小学校の頃から良くてきた。キリストのせいではない」と言う。ところが体だったら私は子どもの頃は弱かつたし、堅いし、不器用だし、それはみんなよく知っています。そういうのが鍛えに鍛えてますます年を重ねるごとに何か生き生きしていくという姿を見たら、

「やはりあいつの中にキリスト様がいらつしやるらしいなあ」と。皆さん、そのように

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言つてみたいではないですか。

「我が語りし言葉は霊なり、生命なり」

と。いや、キリストは、弟子に対して、我々に対して、

「あなた方は私がしたよりもっと大きな業^{わざ}をするよ。我、父のみもとに行けば

なり」（ヨハネ14・12）

とおつしやつたでしょ。何も自分の功績としてしたいのではない。

「私の中のキリストがなさっているのだ」

ということを言いたい。そのことにはみんな有資格者です。このキリスト・イエスの中に在らしめられて在る者はみんな有資格者です。それがなかったらまねごとにしか過ぎません。けれども、これがあれば本ものです。誰にでも成就する道なのです。

私の30年前はこんなこと言っていましたよ。20年前の私でさえ、頼りないと言われていたのですから。そのもつと前のクリスチャンになった時でも、まだまだこんな深いことを知りませんから、ただ無条件に信じて従つただけの時ですから、後からいろいろな葛藤がありました。やはり肉体的にも弱く、よく病気で寝たりもしましたし、小池先生がいろいろしゃべっていると、

「よくあそこまで言えたものだ。あんなことは私はとてもよう言わない」

と（笑）、そのぐらいの感じでした。先生は、

「私が言っているのではない。私の中のキリストがおつしやつているのだ」

なんて言っていました。でも、その先生が

「小学校、中学校時代の自分を知っている者は本当に目を円くして驚いている」

と、おつしやつていました。臆病で弱虫でと散々言っておられたでしょ。だからそれで良いのではないでしょうか。

偉大な事をしようとは思わないが、喜んでる姿を、生き生きしている姿を見て欲しい。私は嬉しいのだ、楽しいのだ、本当に人を愛したいのだ、みんなと抱き合いたいのだと、そういう喜びの姿を見て欲しい。



それで同窓会とか、いろいろなところに行きますと、やはりみんな何か違うと感ぜられるようです。現に私は小学校や中学校、高等学校のお友だちとか、何年かぶりに誰に会っても、握手して本当に嬉しい。そういう広やかなものを下さったのはキリストです。そういうことで、ロマ書8章の1、2節はしつかり叩き込んで欲しい。これが判決主文ですからね。

「すべて神の御霊に導かる者は、これ神の子なり。……これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る」（ロマ8・14～17）

これは宣言ですね。我々はもう世継ぎである。キリストと共に喜びも苦しみも共に受ける世継ぎである。神の世継ぎにしてキリストと共に共同相続人、共同の世継ぎです。キリストが第一人者、第一走者であられたのに、私たち後から来る者を常に抱き取って、

「一緒に走っているのだよ、一緒に行くのだ」と言つて下さっています。

●満を持して時を待つ

「われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。造られたるものの虚無に服せしは、己が願ひによるにあらず、服せしめ給ひし者によるなり」（ロマ8・18～20）

神の国が完成するまでの過渡期の今の苦しみは、何も二千年前のあの時代の苦しみというよりも、この地上を宿としている我々にずっと共通な苦しみです。パウロは自然の呻きの声を、自然界の嘆きというものを聞いた。そして被造物が今空しきに服しているのは、自らの願ひではなく、神様の摂理の中に抱かれてある。いつまでもそういう姿でおかれるのではない。あの大自然の滅びの様も、動物も植物も、山も海も、みんな苦しんでいるが、それが喜びの生命の世界に変えられる時が来るということです。

「然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの栄光の自由に入る望みは存れり。我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを」（ロマ8・21～22）

パウロも祈りの中でビジョンを与えられたわけです。

「然のみならず、御霊の初めの実をもつ我らも自ら心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり」（ロマ8・23）

これはまだ救いが完成していかないと、いわゆる十字架の罪の赦しがまだ出来上がっていないとかいうことではない。十字架の救いは完了してしまっているのです。完了してしまつて本当のものをいただいたからこそ、今地上にある自分と、本当の栄光の姿の自分とのギャップがいよいよ大きいことを感じる。だから、いよいよ天に向かって体を伸ばしながら、あの栄光の姿に化せられることを願うなりということ。多くの人は、



「ああ、魂が救われて天国に行けるのだったらそれで結構です。もうそれ以上何も望みません。あとしばらくそれなりに、お迎えが来るまでまいりましょう」

と思っっているでしょう。しかし、そんなことは言っていない。本物の御霊の生命をいただければいただくほど、今この肉体を宿にして、その枷かせの中に囚こわれているとの嘆きが強くなる。肉体を宿としている間は、すぐ東京に飛んで行くといっても行けない。ずっと光のように飛んで行けないし、不自由ですよ。だから飛行機とか、いろいろな物を発明するのでしょうか。とにかく、その他いろいろな霊界の中にずっと行くことはできない。肉体というもののいろいろな限定を我々は受けています。しかし、それを突破しようという呻きなんです。

昨日も、「忍耐ということを私はよく言った」という、お話がありました。しかし、その「忍耐」はいわゆる耐え忍んでじっと待っている我慢ではなく、何かといえば、満まんを持じしている時が熟するのを待っている。時が満ちたら、爆発する。そういう時の来るのをじっと待っているという忍耐です。今やと待ち構えている忍耐なのです。

甲子園の野球でもプレイボールを始めるとき、ベンチでみんなこうやって待っています。ぱあっと走って行って整列して挨拶してから、プレイを始めます。それから優勝の瞬間もそうですよ。ベンチで待っていて、スリーアウトになったら、ぱあっと飛んで行って、マウンド辺りで監督を胴上げしたりしますね。満まんを持じしてじっと待っている。これは春の自然の姿がそうですよ。冬の間、じっと待っていると、春がやって来て、芽が出て、ドイツなんかでは雪の中からパッとクロッカスの花が咲く。そのようにして我々は冬の時代であるうと眠っているのではない。じっと生命を貯たくわえて時の満ちるを待っているという気持ちです。

23節のこういう望みを我々はしっかりといただき、そして完成された姿を見ている。イエス・キリストというお方の中に、自分もあのキリストの姿に化せられることを見ているのである。だから、忍耐をもつて時を待っています。

●御霊の内実

ところで我々の地上の歩みは、御霊の祈りに助けられています。

「斯かくのごとく御霊も我らの弱きを助けたもう。我らは如何いかに祈るべきかを知ら

ざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成とりなし給う」（ロマ8・26）

昨日も申しましたように、我々の祈りというのは常に御霊みたまに助けられた祈りです。私が祈るのではない、祈らされるのです。

私が手を合わせるのは御霊の執成とりなしによってであって、私の祈り以上に御霊が執成して私の祈りを神様の懐へ届けて下さいます。天界にいらつしやるキリスト、そして父なる神様、我が内に居給う御霊のキリスト、これがずっと通じている。

我々の中に受信基地をもっているから、衛星からのいろいろな映像が写るわけですよ。



宇宙衛星といっても、こちらに受信できる何かがなければだめです。また、こちらから向こうへ発信します。だから、天界から来る語りかけ、靈波、それを我が内なる御霊の主が受けとり、そしてまたこちらから向こうに発信します。即（そく）なんです。そういう現実です。さきほどもはつきりと、

「御霊（みたま）なき者はキリストに属する者にあらず」

とありました。いや、御霊はキリストに抱かれてある者には宿り給う。「十字架即聖霊」という、本当に十字架を受けとれば、そのとき

「御霊はもう我が内に宿り給えり」

なのです。生命の御霊の法なのです。それがあるときは爆発して全身が痺（しび）れたりとか、異言になったりとか、それは神様に任せておけばよろしい。自分で何か、現象を求める必要はありません。自分は本質的にいつもこの

「我、主（とも）と偕（とも）に十字架せられたり」

にあります。

「主様、あなたは恵みをもつて我が内に宿り給いました。ありがとうございます。それだけで結構でございます。あなたという生命が私の生命となり、古き私は死になりました。主様、あなたの生命が我が内に新しく生きて在り給います。私と一つになって下さっています」

と。これがこの御霊です。

「人の心を極（きま）めたもう者は御霊（おんい）の念（ねん）をも知りました。御霊は神（かみ）の御意（みこころ）に適（かな）て聖徒（せいと）のために執成（とりな）し給えはなり。神を愛する者、すなわち御旨（みむね）によりて召されたる者の為には、凡（あい）てのこと相働（あ）きて益（えき）となるを我らは知る」（ロマ8・27〜28）

人の心を極め給うお方は、この御霊の思いを知って、きちんと受けとって下さっています。御霊は神様の御意に適うて我々の為に執り成して下さっている。そして、私たちにとってはそのことが相働きて益となり、プラスとなり、善となつています。

「神（あらか）は預（あ）りじめ知（し）りたもう者を、御子（みこ）の像（かたち）に象（あ）らせんと預（あ）りじめ定め給えり。これ多くの兄弟のうちに、御子（みこ）を嫡子（ちやくし）たらせんが為なり。又その預（あ）りじめ定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光榮（かうえい）を得させ給う」（ロマ8・29〜30）

神様が我々をどのように定めて下さった。主語が大事です。「神様が」であつて、「私の思いが」ではないのです。神様が我々をあらかじめ選んで、そして引っ張り出して、呼び覚まして下さいました。いやあ、神様は本当に長い間、一人ひとりに時が満ちるまで待つて下さった。我々は「主よ」と呼びますが、キリストがご長男で嫡子（ちやくし）であり、私たちはその兄弟だと言つて下さっています。それで、あらかじめ定めたる者を時満ちて召し、召した



る者に義を与え、その義を賜った者に今度は光榮を与え給うとあります。輝く。一人ひとりが物凄く輝くという。

このように神様はキリストにおいて私たちの味方になって下さっています。パウロさんが「神」と言うときは必ず、その中に「キリスト」と我々は読みます。手放しの神様ではない。必ず、キリストというお方において、神はみ旨を顕し給う。我々にとりましては、キリスト抜き神様はないのです。

「されば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。誰か之を罪に定めん、死にて甦り給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か。」

しかし、そんなことは問題ではない。

……されど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもうキリストに頼り、勝ち得て余りあり。

キリストがして下さる。

われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを」（ロマ8・31）

39)

●十字架・聖霊が原点

人間というのは割合、霊的存在に触れるとびつくりする。特に、頭の良い人等は霊的なものにころつとまいるそうですね。科学万能でくるでしょ。そうでないものを見せられると、およそ霊なるものだったら何でもまいっちゃうそうです。でも、聖書をみたら、

「すべての霊を信じるな。本当にキリストを告白する霊だけを信じなさい」

とあります。日本人というのはおおそ霊的なものは皆、神様呼ばわりします。狐も蛇も神様、人間も死んだら皆神様に祭られます。そうではなくて、本当に神の中の神、義の神、愛の神、この真なる神様にしっかりと抱かれて、その方に導かれて生きていく。そういうところがはつきりしていないと、十字架がはつきりしていないと、あぶないですよ。「統一教会」だとか、「幸福の科学」だとか、いろいろなものがありますね。そういうものに何故、足をすくわれるのかと言えば、十字架・聖霊という貫き、このもつとも単純な原点をおろそかにしますと、足をすくわれます。この原点をしっかりと持っていれば、何が来ようと問



題ではない。多くの難しい知識だとか、論議だとか、そういうことは二の次です。本当に大事なことは十字架・聖霊という単純な、しかしもつとも深いすべての源にいつも自分をおいていることであります。

サタンは、

「お前はもつと立派になりたいだろう。お前はもつと幸福になりたいだろう。お前はもつとこうでありたいだろう。だったら、こちらにこんな道があるよ。お前は今騙だまされている。キリストの十字架は失敗なんだよ」

とか、そんなことを言つて、十字架から外はずそうとする。これだけによく知つていて下さい。この世で成功するのが神の前の成功ではないのです。この世で一代の財産を築く。サタンがそれをキリストに持ちかけました。

「ちよつと私の前にひざまずいたら、この世の栄耀えいようえいが栄華を全部あなたにあげる。高い所から飛び下りて怪我一つしないその奇跡を顕したら、人はみんなついてくる。石をパンに変えたら、みんながついてくる。取引をしませんか」

とサタンは言いました。キリストはそれを全部断られた。そして見栄えなき道を行かれました。

十字架のキリスト、本当に見るべき慕おもうべき面影おもかげなしという実に無残な十字架。その十字架の主を私は告白する。

「十字架され給いしキリストのほか、私は何も語らない」

とパウロは言っている。だから、絶対に新約聖書そしてパウロ書簡、ヨハネ書簡、それから離れてはいけません。生命をかけて守つて下さい。難しいことではないですよ。人から、

「あなたのところの教義は何ですか。あなたはどのような教派ですか。どういう偉い先生がいますのですか。歴史はどうですか」

など聞かれても、まともに答えられないですね。そういう外側ではなく、我々はこのキリストのお生命いのち、この聖書に溢れ脈々と流れ、そこから噴煙を上げて沸々と沸き上がっている生命、泉、それに触れた。我々は石ころだが輝くのだ。それが福音だ。全世界といえども、それを相手にしよう。私はこれで行きますよと。どんな宝を目の前に積まれても、びくともしない。不老長寿の薬をやると言われても、そんなことでびくともしない。明日にでも殉教しても良いのだ、今日倒れても良いのだと。そういう本当の不屈のキリスト者なのですね。それでいて下さい。

「どんな物をもつてきても、私をキリストから離すことはできないのだ」

と。私はこのキリストで貫きます。キリストが離し給わない。キリストが私を捕え給うたからです。



●御霊の愛

もし、キリスト教の特徴は何かと言われたら、私は「愛」、これに尽きると思う。我々は愛といえ、^{にようはち}「人が人を愛する、人を好きになる、親が子を大切にする」とか、そういう人から出る愛を思つて、そういう愛しか知らなかった。けれども、聖書においては、キリストにおいては全く別の愛です。我々敵対している者のために生命を捨てて下さるという愛。ご自分の生命を与えて自分は滅びを刈り取るという愛に出会ったのです。

全く今まで我々が想像もしなかった愛に触れた。しかもそれが我々の中に具体的に成就していく。そういう愛。これを新約聖書の中からしつかり受けとっていたきたい。山上の垂訓、ヨハネ福音書、ヨハネの手紙、パウロのロマ書、その他みなこのキリストの愛を叫んでいるのです。

「たとい我もろもろの^{くにびと}国人の言および御使の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く^{にようはち}鐃鉞、

大形の寺院用楽器、

の如し。たといわれ預言する^{ちから}能力あり、またすべての奥義と凡ての知識とに

達し、また山を移すほどの大いなる信仰ありとも、愛なくば^{かぞ}数うるに足らず」

（コリント前13・1〜2）

愛が無ければ一切は空しい。「愛」という言葉は使い古された言葉のようですが、皆さん、この中の本当の内実を一人ひとりのこれからの実生活の中で人生の中で、

「我を見し者はキリストの愛を見しなり」

という、証人でいていただきたいと思ひます。それはキリストの愛を深く知れば知るほど、そうされていくのです。これもまた、受け身なのです。キリストが私をかくも愛していて下さる、その愛に促されて我々は愛の存在にさせられていきます。

生命の御霊の法、^{いのち}その内実^{みたまのり}は愛、人を活かす愛でありました。

「人を活かす^{まこと}真の光ありて世に來たれり」

という、愛でありました。

〔奥田昌道先生還暦記念講筵2『愛』1994年8月7日京都キリスト召団発行より転載〕

